

監修者の言葉

本シリーズは2002年から刊行されてきた「司書教諭テキストシリーズ」の改訂版に相当するものである。1998(平成10)年に学校図書館司書教諭講習規程の内容が大幅に改訂され、これを受ける形で旧版が編集・刊行されたのであるが、それからすでに十余年が経過し、学校図書館を取り巻く状況にも大きな変化が見られる。とりわけ、2008(平成20)年からのいわゆる新学習指導要領には「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・意欲的な学習活動や読書活動を充実すること」(傍点筆者)という文言が盛り込まれており、学校図書館と司書教諭との責任はより大きなものとなっている。

一方では、いわゆるスマートフォンの普及に見られるように、情報化の進展は止まるところを知らず、むしろさらにその進展の度を増しているように見える。ここではあえて「情報化」が何を意味しているのか、その定義についてはふれずにおくが、「情報」と「知識」とは大きく重なり合う概念であることは間違いがない。そしてまた「知識の獲得」が私たちの教育・学習活動の主要な部分であることも言うまでもないことであろう。とするならば、私たちを取り巻く情報環境が大きく変化している以上、それに伴って私たちの教育・学習のあり方も大きな変革を余儀なくされるはずである。当然に学校教育そのものの在り方についても、より真摯な再点検が行われなければなるまい。上記の新学習指導要領の文言にもこのことは反映されていると言える。

こうした状況をふまえて、旧版を全面的に改訂しようということがこの「司書教諭テキストシリーズⅡ」の趣旨である。旧シリーズと同様に、最新の図書館情報学の知見を教育学的な視点から解説し、理論と実践との融合を図るという方針に変わりはないが、比較的若手の著者に執筆を依頼した。「古い革袋に新しい酒を入れる」ことが必要であろうと思われたからである。

残念ながら、一般的な学校教育の現場においては、「学校図書館の機能の活用を図る」ことについても、情報化の進展に伴う学校教育の変革の必要性についても、必ずしも十分な理解が得られているとは言えない。それなりの法整備

は進められてはいても、教育の現場における実践活動は旧態依然の状態に置かれたままであるようにも感じられる。このギャップを埋めるためには、図書館情報学の知識や技術を暗記的に身に付けていくことよりは、これらの知識・技術を教育現場の中でいかに活用すべきか、あるいは活用できるのか、ということについて、理念的に考えてみる必要があるであろう。本シリーズではそのことも強く意識した編集を心がけている。司書教諭資格取得のため勉強中の学生諸君ばかりでなく、すでに学校図書館で実務に携わっている方々、あるいはさらに司書教諭養成の立場にある方々にとっても、本シリーズが「理念的に考えてみる」ことのきっかけとなるよう願ってやまない。

2015年6月

監修者 朝比奈大作

序 文

本書は、「改訂司書教諭テキストシリーズ」の第5巻で、学校図書館司書教諭資格取得のための必修科目「読書と豊かな人間性」のテキストとして刊行する。子どもの読書を導くことに関する内容なので、図書館司書資格取得のための必修科目「児童サービス論」の学修でも参考になるところが多くあると考えている。

「読書」と「豊かな人間性」という科目と本書のタイトルの意味するところについては、本書を読み進めながら、またその後の人生でも、皆さんはずっと考えていくことになるだろう。それらのことばの意味するところもその意義も、簡単に結論を出せるようなことはない。読書とは人間にとってどのような意味をもつものか、人間とは、人間性とは何か、読書が人間性を豊かにするというのは確かなことなのか等、読むことや人間存在に迫る問いは、人間というものが抱えていくことを宿命づけられているような、非常に大きな問いである。

例えば、読書が人間性を豊かにするとは、一般にそう言われてきただろう。しかしそれを科学的に問おうとすると、そのような大きな問いをそのまま丸ごと検討することは困難で、ごく小さな問いに切り分ける必要がある。そうすると、科学的検討の成果は断片的なものにとどまり、もともとの大きな問いに示唆を与えてはくれるが、それに直接答えることとは違ってしまふ。また、そのように科学的に検討されてきた研究成果をふまえるにしても、それはこれまでに証拠を示してそう言った人たちがいるということに過ぎず、それぞれの研究がふたたび検討され、新たな証拠が示され、異なる見方をされる可能性は常にある。一つひとつの小さな研究成果はその検討の範囲よりも大きな文脈ののせると新たな疑問がわいてきたり、問い直しが必要にみえてきたりすることはよくある。そのようににわかには答えを出すことは決してかなわない大きな大きな問いを、本書は扱っているのである。司書教諭は、そのような偉大な課題に、仕事として取り組むということでもある。

学校図書館司書教諭講習規程によれば、「読書と豊かな人間性」には大学設

置基準に定められる2単位の学修が求められる。大学ではたいていこれを15週で学ぶこととしているので、本書も15章で構成している。それを、経験や専門の異なる5名の著者が分担して執筆した。第1章・第2章・第6章・第7章・第15章は図書館情報学の研究者の中村百合子が執筆した。第3章から第5章と第14章は認知心理学の研究者の黒沢学が執筆した。第8章と第9章は同じく図書館情報学の研究者の片山ふみが執筆した。第10章から第13章は学校図書館での専門的な仕事の経験がある中山美由紀と江竜珠緒が、サービス提供に長年の経験がある対象年齢についての章をそれぞれに担当して執筆した。以上の執筆者の編成は、学校や図書館の現場の知見と、図書館情報学と心理学、そして人文学や社会学などの研究成果をふまえ、できるだけ広く読書の導きについて大学生に学び、考えてもらうための教科書を作るという編者のねらいをふまえた判断である。

図書館が人びとに対してすべきことを表す有名な表現の一つに「適書を適者に適時に」というものがある。これは「言うは易く行うは難し」の典型であろう。書を知り人を知り時を知って判断し、行動しなければならない。そのための専門的な知識や技能は、「読書と豊かな人間性」の学修でも一定程度身につけることができるだろうが、司書教諭資格と教員免許状の取得のための他の科目での学修とつなぎ合わせるとさらに有効になるので、そう心がけて欲しい。

皆さんの司書教諭資格取得の学修が実り多きものとなることを念じている。そして、よりよい学校教育の実現、そしてよりよい社会の形成に参画して下さるように。

2026年2月18日

編者 中村百合子

読書と豊かな人間性

も く じ

監修者の言葉 iii

序文 v

第1章 読書とは何か 1

1. 読書と豊かな人間性 1
 - (1) 教科「読書と豊かな人間性」 1
 - (2) 「豊かな人間性」の意味するところ 2
2. 読書, 読むこと, 読む力 5
 - (1) 「読書」と「reading」を比べてみると 5
 - (2) 「literacy」のより現実的な価値 6
 - (3) 読書と学ぶことの関係 8
3. 現代の日本における読書 9
 - (1) 私たちの読書に影響を与えているもの 9
 - (2) 読書へのまなざし 10
 - (3) 1990年代以降の国家的な読書の推進 12
4. 読書の経験の語り 13

第2章 子どもの読書の現状 16

1. 出版と読書の歴史と現状 16
2. 現代の児童・YA向け出版と流通 17
 - (1) 1990年代からの日本の出版の変貌 18
 - (2) 電子書籍市場と電子図書館サービスの拡大 18
 - (3) 児童書の出版動向 20
 - (4) YA向け出版の必要性 21
3. 児童・YAの読書の現状 22
 - (1) 子どもの不読率の増加と反転 22

- (2) 若者は読書離れをしているのか 26
 (3) 子どもは読書を楽しんでいるか 28

第3章 読書のメカニズム (1) 語の理解 ————— 30

1. 読みと記憶 31
 (1) 実験1：数唱課題 31
 (2) 実験1の結果予想 31
 (3) マジカルナンバーセブン 32
 (4) ワーキングメモリ 33
 2. 二種類の記憶..... 35
 (1) 実験2：ことばと記憶 35
 (2) 実験2の結果予想 35
 (3) 長期記憶 37
 (4) 長期記憶による意味づけ 38
 3. 視覚的入力からの情報処理..... 39
 実験の教示文と課題 42

第4章 読書のメカニズム (2) 主観的な意味世界の形成 ————— 43

1. 心的辞書へのアクセス..... 44
 2. 文の表象..... 44
 (1) 実験3：アナログ表象 45
 (2) 実験4：命題表象 46
 (3) 命題のネットワーク表現 47
 (4) 二種類の表象と理解 49
 (5) テキストベースと状況モデル 49
 (6) 豊かな表象による鑑賞 51
 3. 長期記憶とスキーマを用いた読み 52
 (1) スキーマとスクリプト 53
 (2) スキーマへの同化 55

(3) スキーマの調節	56
(4) ワーキングメモリによる制御	57
4. 読書とメタ認知	58
実験の教示文	60

第5章 読書の力の獲得と豊かな人間性—————61

1. 読書と社会性の発達	61
2. 言語の発達段階説	62
3. 言語の発達を支えるさまざまな能力	64
(1) 語彙の獲得	64
(2) 語彙爆発とそれを支える推論	65
(3) 指さしと共同注意, 意図の理解	65
(4) 指示対象の特定	66
(5) 心の理論	67
(6) 模倣	68
(7) 操作と抽象的思考	68
(8) 読書のための動機づけと読書への没入	69
(9) 他者への共感	70
(10) 心的能力が複合的に支える読書	70
4. シミュレーションとしての読書	71
5. 長けた読み手になるまで	72

第6章 読書の導きにおける発達と特別なニーズ—————75

1. 年齢と発達と読書の変化	75
(1) 読書能力と読書興味の発達段階説	76
(2) 子どもの発達の転換期と読書	78
(3) イギリスの読書教育論	80
(4) アメリカの読書教育論	82
2. 特別なニーズをもつ児童・生徒	83

- (1) 多様なバリアのある児童・生徒 84
- (2) 外国にルーツのある児童・生徒 88

第7章 読書の導きの理論 89

- 1. 読書の導きの着手 89
- 2. 読書指導の理論化 91
- 3. 読書指導の領域 92
 - (1) 阪本一郎が示した領域 94
 - (2) 滑川道夫が示した領域 95
 - (3) 倉澤栄吉が示した領域 96
 - (4) 大村はまが示した領域 98
 - (5) 堀川照代が示した領域 99
- 4. 読書の導きに関する新しい論点 101
 - (1) リテラシーへの接続 101
 - (2) 強制的に読ませるべきか 103
 - (3) 多様な学び方の包摂 104

第8章 読書へのいざない 105

- 1. 図書館利用と読書にいざなう各種メソッドの採用 105
 - (1) 図書館だよりや推薦図書リスト 105
 - (2) ウェブページやSNSからの発信 108
 - (3) 外部との連携 109
- 2. 読書にいざなう各種メソッド 113
 - (1) 読み聞かせ 114
 - (2) ストーリーテリング 116
 - (3) ブックトーク 118
 - (4) 朝の読書 120

第9章 生涯の主体的読書に導く122

1. 主体的読書に導く各種メソッドの採用122
2. 主体的読書に導く各種メソッド123
 - (1) 読書感想文 124
 - (2) 読書感想画 125
 - (3) POP 126
 - (4) 読書へのアニメーション 127
 - (5) ビブリオバトル 128
 - (6) リテラチャー・サークル 130
 - (7) リーディング・ワークショップ（読書家の時間） 131
 - (8) 読書会 133
 - (9) 読書アプリの活用 134

第10章 小学校低学年の読書の導き136

1. 小学校低学年の読書136
2. 小学校低学年のためのコレクション形成137
 - (1) 物語を味わう読書：フィクション 137
 - (2) 探究のための読書：ノンフィクション（読み通す本） 139
 - (3) 情報活用に通じる読み：ノンフィクション（参照する本） 140
 - (4) 読書コレクション形成の留意点 141
3. 読書を導く効果的アプローチ143
 - (1) 読書の習慣化：図書館の時間 143
 - (2) 集団アプローチ 144
 - (3) 個別アプローチ 146
 - (4) 小学校全体のアプローチ 148

第11章 小学校中・高学年の読書の導き154

1. 小学校中・高学年の読書154
2. 小学校中・高学年のためのコレクション形成155

- (1) 物語を味わう読書：フィクション 156
- (2) 探究のための読書：ノンフィクション（読み通す本） 158
- (3) 情報活用に通じる読み：ノンフィクション（参照する本） 159
- (4) 読書環境は情報環境 160
- 3. 読書を導く効果的アプローチ 161
 - (1) 読み広げる環境づくり 161
 - (2) 集団アプローチ 162
 - (3) 個別アプローチ 165

第12章 中学生の読書の導き 168

- 1. 中学生の読書 168
- 2. 中学校図書館でのコレクション形成と読書環境 169
 - (1) コレクションの形成 170
 - (2) 環境づくり 174
 - (3) 教員のためのコレクション 175
- 3. 読書を導く効果的アプローチ 176
 - (1) 集団アプローチ 177
 - (2) 個別アプローチ 179

第13章 高校生の読書の導き 181

- 1. 高校生の読書 181
- 2. 高等学校図書館でのコレクション形成と読書環境 182
 - (1) コレクションの形成 182
 - (2) 環境づくり 190
- 3. 読書を導く効果的アプローチ 191
 - (1) 集団アプローチ 192
 - (2) 個別アプローチ事例 194

第14章 デジタル化と読書196

- 1. デジタル化されたテキストの読み196
 - (1) コンテンツとメディアの分離 197
 - (2) デジタルでの読書の特徴 198
- 2. メタ認知を要求するデジタル化されたコンテンツ204
 - (1) 複数のテキストの読みとメタ認知 204
 - (2) 批判的思考とメタ認知 206
 - (3) スクリーン劣勢効果 207

第15章 読書の導きに関わる現代の課題210

- 1. 情報環境の変化への対応210
- 2. 出版の変貌を捉える211
 - (1) 現代メディア環境の中の読書 212
 - (2) マスメディア不信の中の読書 214
- 3. 司書教諭独自の貢献216
 - (1) 大人の協力関係をつくる 216
 - (2) 豊かなことばと読みを導く 217
 - (3) 誰にとっても大切な選書の力を育む 218
 - (4) 専門的な学習の継続 220

参考文献 221

さくいん 223

[執筆分担] (執筆順)

中村百合子：第1章，第2章，第6章，第7章，第15章

黒沢 学：第3章，第4章，第5章，第14章

片山ふみ：第8章，第9章

中山美由紀：第10章，第11章

江竜珠緒：第12章，第13章

第 1 章

読書とは何か

本章では、日本社会における読書についてのさまざまな語りや取り組みを整理して提示し、読書とは何なのかを多角的に見直す。まず、本科目のタイトルである「読書と豊かな人間性」の意味するところは確認しておく必要がある。先人たちの読書に関わる取り組みや読書の経験の語りにも関心を寄せたい。そして、皆さん自身の読書もふりかえて、自分にとって読書とは何かを改めて考えてみてほしい。

1. 読書と豊かな人間性

「読書と豊かな人間性」という表現は、1998(平成10)年に文部科学省令の学校図書館司書教諭講習規程が大きく改正された際に現れた。同講習規程は、学校図書館法の第5条第4項の規定に基づいて、学校図書館の専門的職務を掌らせる司書教諭になる為に必要な、大学その他の教育機関が文部科学省の委嘱を受けて行う講習を規定するべく定められているものである。改正を経て、司書教諭の国家資格を得るには講習で5科目10単位を修得すべきこととされた。その5科目のうちの一つが「読書と豊かな人間性」(2単位)である。

(1) 教科「読書と豊かな人間性」

1998(平成10)年の学校図書館司書教諭講習規程の改正に先立って文部省(当時)は、学校図書館の充実等に関する調査研究協力者会議を設けた。同会議からの報告をもとに、文部省は「司書教諭の講習科目のねらいと内容」という文

表 1-1 文部科学省が1998年に示した「読書と豊かな人間性」のねらいと内容

ねらい	児童生徒の発達段階に応じた読書教育の理念と方法の理解を図る
内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 読書の意義と目的 2. 読書と心の教育（読書の習慣形成を含む） 3. 発達段階に応じた読書の指導と計画 4. 児童・生徒向け図書の種類と活用（漫画等の利用方法を含む） 5. 読書の指導方法（読み聞かせ、ストーリーテリング、ブックトーク等） 6. 家庭、地域、公共図書館等との連携

書を出して各科目について説明を加えた。「読書と豊かな人間性」については次のようにされた（表1-1）¹。これは現在も有効である。

また、全国学校図書館協議会（全国SLA）は、この省令改正にあわせて「学校図書館司書教諭講習講義要綱」を発表した。その10年後の2019（平成31）年には、「大学（教員）が作成する講義要綱（シラバス）の参考となる標準的な講義内容について」として、「学校図書館司書教諭講習講義指針」を発表した。その中でも、「読書と豊かな人間性」の「科目の概要とねらい」や「内容」について、指針となるような考えが示されているので、別途参照されたい。

（2）「豊かな人間性」の意味するところ

前述の学校図書館の充実等に関する調査研究協力者会議では「司書教諭講習の充実に関する委員会」が設けられるなどし、有識者によって、司書教諭に必要とされる資質能力や講習科目や講習内容の時代にあった改善が議論された。1998年2月25日に提出された同協力者会議の「司書教諭講習等の改善方策について（報告）」では、次のように、司書教諭のあるべき姿が述べられている（下線は筆者による）。

魅力ある学校図書館づくりのためには、情報教育の一翼を担う学習情報セ

1：文部省初等中等教育局長辻村哲夫「学校図書館司書教諭講習規程の一部を改正する省令について（通知）」同省、1998.3.18. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1327076.htm, (参照2025-11-10). この「（別紙2）司書教諭の講習科目のねらいと内容」を参照。

ンターとしての機能の充実を図るとともに、教師としての使命感と専門性を備え、心の教育を推進する読書教育の専門家としての司書教諭の確保が不可欠²

ここで言及されている「心の教育」と、また「豊かな人間性」は、与謝野馨文部大臣が第15期中央教育審議会（会長・有馬朗人）に「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」諮問したのに対して、1996(平成8)年7月に行われた第一次答申の中で用いられた表現である³。この答申に提言された、ゆとり；生きる力；学校・家庭・地域社会の連携；教育内容の厳選；家庭や地域社会の教育力の向上のうち、ゆとりと教育内容の厳選という方針は特に批判や論争を呼び、見直されてきた。しかし、残る方針は現在まで大きくは変更されずにきている。

このような、大きな影響をもたらした答申の中で、「豊かな人間性」は次のように、「生きる力」と合わせて、説明された（以下、下線は筆者による）。

我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を〔生きる力〕と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。

そして、これからの学校像を記述した箇所では、次の2か所で「豊かな人間性」が言及された。

〔生きる力〕の育成を基本とし、知識を一方向的に教え込むことになりがちであった教育から、子供たちが、自ら学び、自ら考える教育への転換を

2：[『学校図書館』編集部]「司書教諭講習等の改善方策について（報告）」『学校図書館』570号、1998.4、p.65-71。引用はp.66。

3：[第15期中央教育審議会]「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」[文部省]、1996.7.19、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm。(参照2025-11-10)。

目指す。そして、知・徳・体のバランスのとれた教育を展開し、豊かな人間性とたくましい体をはぐくんでいく。

豊かな人間性と専門的な知識・技術や幅広い教養を基盤とする実践的な指導力を備えた教員によって、子供たちに〔生きる力〕をはぐくんでいく。また、初等中等教育で「育成すべき資質・能力」を記述した一部にも、次のように「豊かな人間性」への言及がある。

他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、自然や美しいものに感動する心、正義感、公德心、ボランティア精神、郷土や国を愛する心、世界の平和、国際親善に努める心など豊かな人間性を育てると共に、自分の生き方を主体的に考える態度を育てること。

「人間性」とは、辞書をひけば、「人間らしさ」とか、「人間の本性」であるとかいった意味があるとされている。それを、「他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、自然や美しいものに感動する心、正義感、公德心、ボランティア精神、郷土や国を愛する心、世界の平和、国際親善に努める心など」として、一般に望ましいとされるだろう心の動きや心もちのようなものを例示したうえで、「豊かな人間性」と同答申ではまとめている。

さらに、社会教育における提言の中では、次のように読書について述べられ、読書が人格形成に大きな役割を果たすとされた。

読書は人格形成に大きな役割を果たすものであり、図書館においては、読書活動の一層の促進を図るため、蔵書の充実のほか、子供への読書案内や読書相談、子供のための読書会などの事業の充実などにもっと努めていく必要がある。

実際に、読書がそのような、望ましい人間の心の動きや心もち、人格形成を実現するものか、もしくは反対に、そのようなものをもたらすように読書は取りくまれるべきなのかなど、読書と「豊かな人間性」の関係性は議論ができる。また、そのような問いは、読書を他の人に勧めるのならば、一度、立ちどまって考えてみるべきだろう。

2. 読書、読むこと、読む力

「読書」とは何かを問うても容易には結論が出るはずがないということは、本書の序文から述べてきた。ただ、本書のこの後の議論のため、「読書」を定義することをここで試みる。

(1) 「読書」と「reading」を比べてみると

日本の読書の導きに関する議論では、特に第二次世界大戦後には、アメリカの研究が常に参照にされてきた。そこで読書についての日本語と英語の議論を並べてみると、英語では、読む行為の名詞形が「reading」一つだというシンプルさに気づく。一方で、日本語でそれには「読書」「読むこと」「読み」と複数の表現が考えられる。「読むこと」は動詞の「読む」に「こと」を付けて名詞化した表現で、英語の「reading」に形からは最も近そうである。「読み」は古くは「よみ」と記され、広い用法がみられてきた。「よみ」や「よむ」は、ひらがなで表記されれば、例えばみとおすとか、詩歌をつくるとかいった、より多様な意味を多くの人は思いつくだらう。英語の「read」にも同様の意味はある。

戦前から子どもの読書について研究していた阪本一郎は、戦後になりCIE図書館に入りびたって「readingに関するものはほとんどみな読んだ。その頃はreadingの訳語に「読み」とか「読むこと」とかを用いていたが、これは「読書」と訳してもよいのではないかと考えた。」⁴と晩年にふりかえった。しかし、阪本のように、「読書」を英語の「reading」同様に広くとらえる態度は、現代の日本ではおそらく一般的ではないだろう。読書とは、図書・書物・書籍・本と呼ばれる、一定程度の分量の書かれたものが一つにまとめられ綴じられた冊子を、基本的にははじめから終わりまでとおして読むことという理解がより一般的であろう。本書でも基本的には「読書」はそのような定義である。

4：阪本一郎『私の読書学遍歴』学芸図書，1977．引用はp.2.

[シリーズ監修者]

朝比奈大作 元 横浜市立大学教授
あさひ ないさく

[編集者・執筆者]

中村百合子 (なかむら・ゆりこ)

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位
取得満期退学・博士 (教育学) (東京大学)
現在 立教大学学校・社会教育講座教授
主著 『占領下日本の学校図書館改革：アメリカ
の学校図書館の受容』 慶應義塾大学出版会,
2009

[執筆者]

江竜珠緒 (えりゅう・たまお)

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
博士後期課程修了・博士 (図書館情報学)
(筑波大学)
現在 明治大学付属明治高等学校・中学校司書教
諭
主著 『学校図書館員と英語科教諭のための英語
多読実践ガイド：導入のためのブックガイ
ド付』 (共著) 少年写真新聞社, 2018

黒沢 学 (くろさわ・まなぶ)

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位
取得満期退学
現在 東京電機大学未来科学部教授
主著 『認知心理学：知のアーキテクチャを探る』
(分担執筆) 有斐閣, 2011

片山ふみ (かたやま・ふみ)

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
博士後期課程修了・博士 (図書館情報学)
(筑波大学)
現在 聖徳大学文学部文学科准教授
主著 「大人の絵本に対する価値観からみえる子
どもの読書環境：出版界、図書館界、幼児
教育・保育界の共通点から」『図書館総合
研究』no.24, 2024, 1-16.

中山美由紀 (なかやま・みゆき)

東京学芸大学教育学部初等教員養成課程国
語選修卒業・学士 (教育学) (東京学芸大
学)
現在 成蹊大学文学部非常勤講師
主著 『未来の図書館研究所『図書館員の未来カリ
キュラム』』 (共著) 青弓社, 2023

司書教諭テキストシリーズⅡ…4

読書と豊かな人間性

2026年2月24日 初版第1刷発行

〈検印廃止〉

著者代表 中村百合子

発行者 大塚栄一

発行所 株式会社 樹村房
JUSONBO

〒112-0002

東京都文京区小石川5-11-7

電話 03-3868-7321

FAX 03-6801-5202

振替 00190-3-93169

<https://www.jusonbo.co.jp/>

イラスト／可児千保

印刷／亜細亜印刷株式会社

製本／有限会社愛千製本所

©Yuriko Nakamura, Tamao Eryu, Fumi Katayama,

Manabu Kurosawa, Miyuki Nakayama 2026 Printed in Japan

ISBN978-4-88367-254-7 乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。